

第 30 回西アジア発掘調査報告会の開催にあたって

日本西アジア考古学会会長 三宅 裕

西アジア発掘調査報告会は、今回で第 30 回という節目を迎えることになりました。年に 1 度開催され、それが 30 回を数えるということですから、昨年創立 25 周年を迎えた日本西アジア考古学会よりも長い歴史をもっているということになります。ご存知の方も多いとは思いますが、西アジア発掘調査報告会の開催は、本学会の設立にたいへん大きな役割を果たしました。科学研究費補助金「西アジア史研究のデータベース化に関する総合的研究」(研究代表者：松本健)の一環として 1994 年に第 1 回が開催され、それ以降各調査団の枠を超えた交流が盛んになったことが、本学会創立の大きな原動力となりました。したがって、発掘調査報告会は本学会の礎ともいべきものであり、学会としても特に重要な事業と位置付けています。

幸いなことに毎回多くの方々にご参加いただき、学会員だけでなく広く一般の方々にも関心をもっていただいています。それは発掘調査の醍醐味をリアルタイムに近い形で共有できるところにあるのではないかと思います。しかし、ここ 2 年は発掘調査報告会も開催そのものが危ぶまれるような事態に直面することになりました。コロナ禍により多くの調査団が発掘調査の中断を余儀なくされることになったからです。中には、帰国後の隔離期間、あるいは高額なタクシー料金の支払いを覚悟した上で、果敢にも調査に出かけた方もいらしたようですが、所属機関から出張の許可が下りず、やむなく調査を断念したという方が大半であったと思います。幸いにも昨年は多くの調査が再開され、新しいプロジェクトも開始されるようになったことは、今回のプログラムをご覧いただければ、おわかりいただけると思います。発掘調査報告会がようやく本来の姿を取り戻すことができたことを大変喜ばしく思っています。

せっかく 30 回目を迎えることになりましたので、ここまでの西アジア発掘調査報告会の道のりを簡単に振り返ってみたいと思います。下の表に、第 1 回からおよそ 10 年ごとに国別の報告件数をまとめてみました。回によっては遺跡踏査の報告も含まれ、またその年度におこなわれた発掘調査が漏れなく報告されているわけではないようですが、大まかな傾向は読みとる

	BGR	EGY	TUR	AZE	SYR	LBN	ISR	JOR	IRQ	SAU	BHR	ARE	OMN	IRN	KGZ	KAZ	UZB	PAK	計
第 1 回(1994 年)			1		3						1	1							6
第 10 回(2003 年)		3	2		4	1		2		1			1	1					15
第 20 回(2013 年)	1	3	3	1			1	3						1	1	1		1	16
第 30 回(2023 年)		2	3	1			1	1	2	2	1				5		3		21

ことができるのではないかと思います。まず指摘できるのは、第10回以降の報告件数の顕著な増加です。すでに2003年の段階で、現在と大きく変わらない数の報告がなされているのはやや意外ではありましたが、それは科研費の予算額の推移とも対応しているようにみえます。また、調査件数の増加にともない、調査地域も広がりをみせています。シリアのように現地の政情に大きな影響を受けたケースもありますが、最近では中央アジアでの活動が盛んになっている様子うかがわれます。西アジアと東アジアを結ぶ重要な地域であるだけに、大いに注目されるどころです。

こうした発掘件数の増加や調査地域の拡大は、会員の活動が盛んになっていることの表れであり、大変喜ぶべきことですが、その一方で思いもよらぬ問題も出てきています。少なからぬ数の調査団が人手不足に悩んでいるのです。これでは調査の遂行に支障が出かねないばかりか、学会の将来にとっても由々しき事態となりかねません。発掘調査は若手研究者を育成するまたとない機会ですが、調査の実施と後進育成のサイクルを確立させていけるよう、学会としても積極的に取り組んでいきたいと考えています。

最後になってしまいましたが、2月6日の未明に発生したトルコ南部を震源とする地震は、トルコとシリアに甚大な被害をもたらすこととなりました。犠牲となった方々のご冥福をお祈りするとともに、被災地の一日も早い復興を願ってやみません。本学会としてもどのような貢献ができるのか考えていきたいと思っております。
